カンボジアへ医薬品

AMDA通じて メーカー提供

緊張が続くカンボジアのコンポンスプー州プノムスロイ地区で、難民や傷ついたポル・ポト派兵士にも医療の手を差しのべている「アジア医師連絡協議会（AMDA）」（本部・岡山市、菅波茂代表）に、東京や大阪の化学、医薬品メーカーから抗生物質などを提供したいとの申し出が相次ぎ、八日までに二社から五千万円相当の抗生物質が届いた。

プノムスロイ地区はプノンペンの西約五十キロ。二年前までポル・ポト派の支配地域で、タイからの帰還民や国内の被災を避けてたどり着いた難民ら約五万人が生活する。マラリア蚊の発生地域だが緊張状態のため非政府組織（NGO）も入り込めず、地区病院も機能を停止したままだった。

ここに九月下旬、ロンドン大学を卒業したばかりで熱帯の病気に詳しいAMDAの高橋央医師(三〇)とオーストラリア、カナダの医師の三人の医師団が入り、地区病院を再建し、ワゴン車で回ってワクチン接種や紙芝居による衛生教育を実施。ポル・ポト派支配地域でも巡回診療してきた。

AMDAは、郵政省国際ボランティア貯金からカンボジア支援として今年度千三百万円の資金援助を受けて活動してきたが、住民の大半がマラリアにかかっており、地雷を踏んで重傷を負う住民も月三人のペースで増加。ポル・ポト派兵士の中にさえ、重い肺炎の患者がいるなど深刻な衛生環境だという。医薬品は底が見え、資金も不足気味で協力を呼びかけている。

これまでに支援を表明した日本アップジョン社は、肺炎などに有効な抗生物質十五万箱の寄贈を約束。また、大阪市の沢井製薬は抗生物質五千錠を届けた。菅波代表は「自分たちで協力できる分野のNGOを支援していく形の国際貢献が今後も増えていくと思う」と話している。アジア医師連絡協議会（086・284・7676）。

再建した病院で住民を診察するアジア医師連絡協議会の高橋央医師（写真右）
＝カンボジア・プノムスロイ地区で、アジア医師連絡協議会提供